京都市内遺跡発掘調査概報

平成12年度

2001年３月

京　都　市　文　化　市　民　局

ごあいさつ

京都は，世界に誇る数多くの歴史遺産に恵まれた大都市であります。市内の埋蔵文化財包蔵地には，年代ごとに幾層にもわたり積み重ねられ，歴史の重みをもつ遺跡が数多く存在いたします。

このような埋蔵文化財は，我が国の歴史や文化の成り立ちを知ることができる国民共有の貴重な財産であり，将来にわたって保存していかなければなりません。

近年，埋蔵文化財包蔵地内における土木工事等による開発行為は，これらの埋蔵文化財に少なからず影響を及ぼしており，先人が残した埋蔵文化財を引き継いだ私達は，その保存と開発との調整を適切に行い，これを後世に伝承していく責務があります。

さて，この度，平成12年度に本市が文化庁の国庫補助を得て実施した埋蔵文化財調査の結果をまとめた概要報告書を作成致しました。調査のうち，試掘調査は京都市埋蔵文化財調査センターが実施し，発掘調査及び立会調査は，財団法人京都市埋蔵文化財研究所へ委託し実施したものであります。各調査の実施に当たりまして，御理解と御協力を賜りました市民の皆様をはじめ，御指導と御助言を賜りました関係機関の皆様に深く感謝申し上げますとともに，本報告書が京都の歴史を知るための一助として，お役に立てていただければ幸いに存じます。

平成13年３月

京都市文化市民局長

中野　代志男

例　　　言

1　本書は、京都市文化市民局が財団法人京都市埋蔵文化財研究所に委託して実施した文化庁国庫補助事業による平成12年度の京都市内遺跡発掘調査概要報告である。

2　調査地は、下記である。

　山科本願寺跡　京都市山科区西野左義長町19－1他

3　調査は、吉崎 伸が担当した。

4　写真撮影は、遺構・遺物ともに主に村井伸也、幸明綾子が担当し、一部は吉崎 伸が行った。

5　本書で使用した土壌色名は、農林水産省農林水産技術会議事務局監修の『新版標準土色帖』に準じた。

6　測量基準点は、京都市遺跡発掘調査基準点を使用した。調査における測量基準点の設置は、宮原健吾が行った。本書中で使用した方位および座標の数値は、平面直角座標系Ⅵによる。また、標高はＴ．Ｐ．（東京湾平均海面高度）による。

7　本書で使用した地図は、京都市長の承認を得て同市発行の京都市都市計画図（山科・勧修寺縮尺1/2,500）を調整したものである。

8　本書の執筆・編集は吉崎 伸が行い、整理作業には桜井みどりが参加した。

本　文　目　次

山科本願寺跡

Ⅰ　調査経過 ……………………………………………………………… 1

Ⅱ　遺跡の環境と位置 …………………………………………………… 2

Ⅲ　遺　　構 ……………………………………………………………… 3

1.　室町時代の遺構 …………………………………………………… 3

2　江戸時代の遺構 …………………………………………………… 5

Ⅳ　遺　　物 ……………………………………………………………… 5

1　古墳時代の遺物 …………………………………………………… 5

2　室町時代の遺物 …………………………………………………… 5

3　江戸時代の遺物 …………………………………………………… 6

Ⅴ　ま と め ……………………………………………………………… 7

報告書抄録 ……………………………………………………………… 9

図　版　目　次

図版１　遺跡　遺構実測図

図版２　遺跡　１　１トレンチ北壁断面図

２　３トレンチ南壁断面図

図版３　遺跡　１　建物４、土壙８・９実測図

２　建物５実測図

３　暗渠３実測図

図版４　遺跡　山科本願寺南西部遺構配置図および調査一覧

図版５　遺跡　山科本願寺復原図および調査一覧

図版６　遺跡　１　調査区全景（西から）

２　建物４・５（北から）

図版７　遺跡　１　土塁２断面の状況〔１トレンチ北壁〕(南東から)

２　暗渠３検出状況（東から）

３　暗渠３蓋石除去後の状況（東から）

挿　図　目　次

図１　調査位置図……………………………………………………………………………………………1
図２　調査区配置図…………………………………………………………………………………………2
図３　出土遺物実測図・拓影………………………………………………………………………………6
図４　巴文軒丸瓦（12）……………………………………………………………………………………6
図５　鬼瓦（13）……………………………………………………………………………………………6

山科本願寺跡

I　調査経過

今回の調査は急速に進む宅地開発に先行して、山科本願寺関連遺構を確認するために実施した国庫補助事業である。調査地は山科区西野左義長町に位置し、山科本願寺「御本寺」の南西の端に推定される所である。数年前までこの周辺は土塁や堀がよく保存されていたが、近年来の宅地開発ですべて破壊されてしまった。それらの開発に伴い、平成９～11年に実施された調査[註1]では、ほぼ原形を留めたＬ字形に曲がる土塁や堀、その内側では建物や井戸、鍛冶関連遺構など重要な遺構が確認されている（図版４）。

本調査地はすでに駐車場として整地されており、地表面で土塁の痕跡を確認することはできなかった。しかし、敷地の西側には南流する水路があり、これが土塁の外側を巡る堀の跡を示すものと推測できた。こうした状況から、敷地の西側には土塁の基底部が、また東側には建物などの遺構が遺存していると考えられた。調査にあたっては敷地が東西に細長いため、排土置き場などを確保する関係から全域にわたる調査は困難であると判断した。そこで、今回、土塁と堀の部分に関しては土層断面の観察にとどめ、敷地の東部、すなわち土塁の内側に展開する遺構の状況を把握することに主眼を置くこととした。

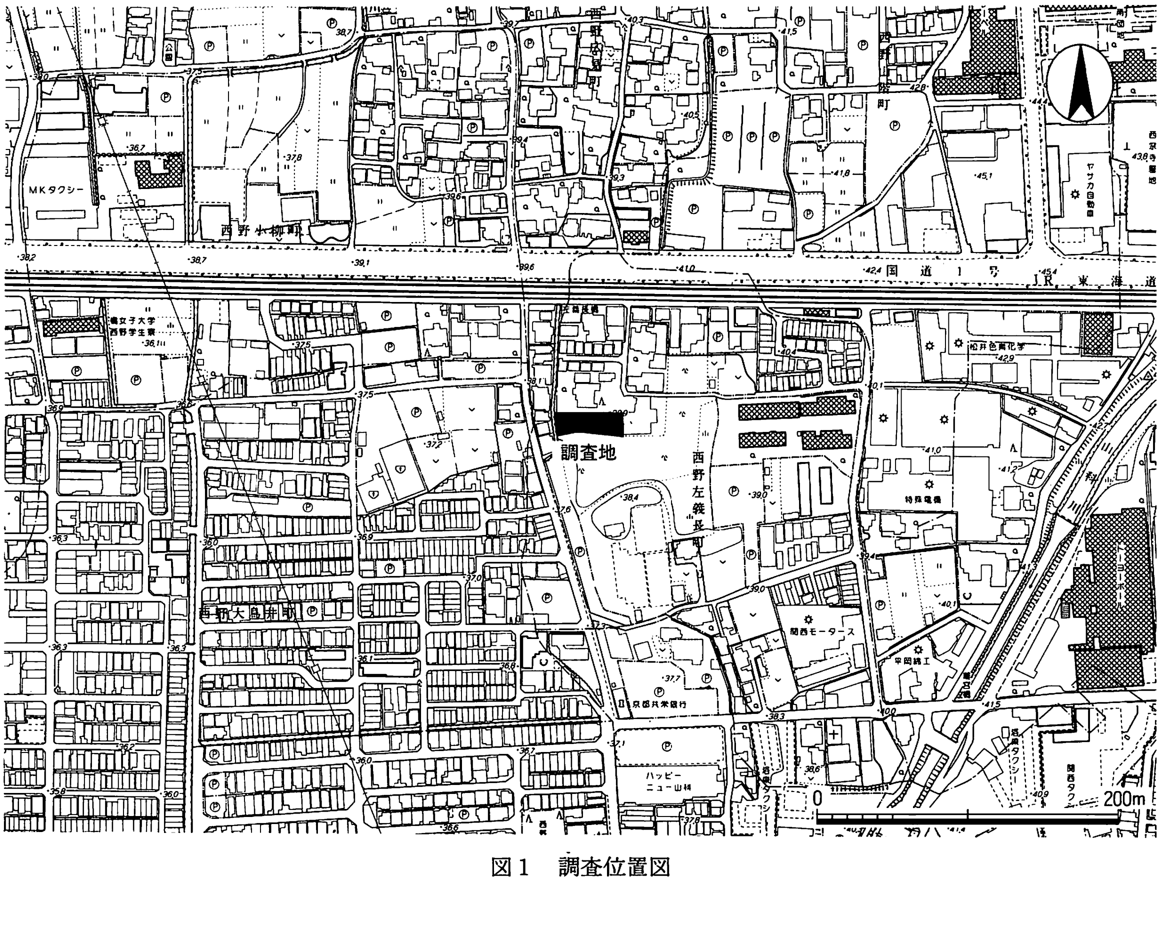


図１　調査位置図

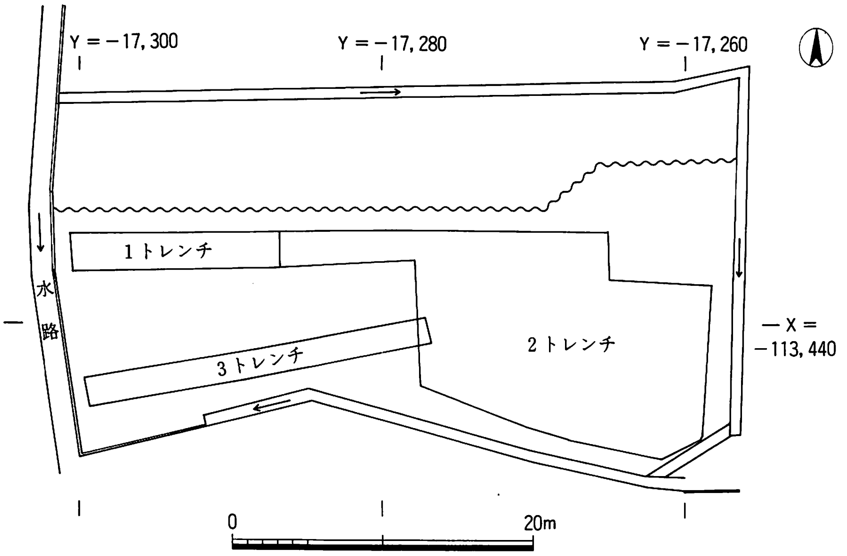


図2　調査区配置図

調査は、まず敷地の北西部に土塁と堀の断面観察用トレンチ（1トレンチ）を設けた。ここでは予想通り堀の一部と土塁の基底部を確認し、その範囲と構築状況を把握した。この1トレンチを埋め戻した後、敷地西半を排土置き場として東部に調査区（2トレンチ）を設定した。2トレンチの調査では建物、土壙、溝などの遺構を検出し、山科本願寺土塁内部に展開する遺構の一端を明らかにすることができた。最後に、調査区の南西部に断面観察用のトレンチ（3トレンチ）を設け、土塁の方向を確認した。

なお、調査終了後は駐車場に復旧するため、掘削部を土壌改良し、全体を整地した。

II　遺跡の環境と位置（図版5）

浄土真宗中興の祖、蓮如上人は本願寺再興の地を山科に求め、真宗寺院を中心とした壮大な都市を建設する。これを「山科本願寺」とよび、周りに堀や土塁をめぐらせた環濠城塞都市であった。造営は文明十年（1478）から開始され、この年に「小坊」「馬屋」、以後順次「庭園」「伺所」「寝殿」「御影堂」などの諸堂が築造され、文明十三年（1481）の「阿弥陀堂」の完成をもって山科本願寺はほぼ完成した。

その位置は山科盆地の中央やや西より、四ノ宮川と山科川の合流点の西側一帯である。ここは両河川が形成する扇状地の先端部に相当する。現地名では山科区西野今屋敷町・様子見町・阿芸沢町・広見町・山階町・大手先町・離宮町・左義長町、東野舞台町にあたり、その規模は東西約0.8km、南北0.9km、総面積約80ヘクタールにおよぶものと推定されている。現在でもこの周辺には土塁や堀の一部が竹藪や雑木林あるいは水路として遺存しており、その規模を偲ばせている。

山科本願寺は中核をなす「御本寺」とそれを取り巻く「内寺内」「外寺内」とよばれる3つの郭によって構成されており、寺院の諸堂のほかに寺内町と称される町並みがつくられていた。ここでは各種の商業活動や手工業生産が盛んに行われ、経済的にも発展した。しかしながら、その隆盛も長くは続かず蓮如の二代後、証如の時代には戦国の争乱に巻き込まれる。そしてついに天文元年（1532）日蓮宗徒、近江の守護六角氏らの軍勢によって焼き討ちされ、一堂残らず灰燼に帰してしまった。その際、侵入軍の突破口となったと記録されている「水落」が本調査区の周辺であると推測されている。

Ⅲ 遺　構

調査区の基本層序は上から現駐車場の整地層10～30㎝、江戸時代の耕作土と思われるオリーブ褐色砂泥層（2.5Y4/3）や暗褐色粘質土（10YR3/3）などが30～40㎝続き、その下に山科本願寺造営時の整地層である暗灰黄色砂泥層（2.5Y4/2）や暗灰黄色砂泥層（2.5Y5/2）、オリーブ褐色砂泥層（2.5Y4/4）など合わせて40～60㎝ある。その下がにぶい黄褐色粘質土（10YR5/4）や黄灰色泥砂層（2.5Y5/1）の地山である。

今回検出した遺構は主に室町時代のものと江戸時代のものがある。室町時代のものは山科本願寺関連の遺構と考えられ、上述の整地層上面で検出した。本来、地山面の地形は北側から南および西側に緩やかに傾斜している。そのため山科本願寺造営に当たっては大規模な整地を行い平坦面を確保している。整地層上面の標高は38.0m前後である。

なお、調査では江戸時代の遺構を室町時代の遺構と同一面で検出したが、本来は江戸時代の耕作土上面に成立したものである。

1　室町時代の遺構（図版1、6－1）

調査区の西端では南北方向の堀の一部、その東側では土塁の基底部を確認した。また、調査区東側では小規模な建物2棟を確認し、これらを区画する溝も検出した。さらに土塁と建物間は数基の土壙が並んでいることを確認した。また、遺構面には焼土や炭化物が随所に認められ、礎石の一部などにも火を受けた痕跡が認めらる。これらは天文元年（1532）の焼き討ちの状況を伝えるものと考えられる。以下、主な遺構について述べる。

堀1　調査区の西端で確認した南北方向の堀である。1トレンチでは東肩部を確認した。3トレンチでは、東肩部から幅約5mにわたって検出したが西肩は確認できなかった。この堀は近年まで溝として機能していたと考えられ、埋土からは室町時代の遺物と共に江戸時代後期の遺物が出土している。なお、地盤が軟弱で崩壊のおそれがあるため底部は確認できなかった。

土塁2（図版2、7－1）　調査区の西側で確認した南北方向の土塁である。基底部の幅は約15.0m、上方は削平されており、残存高は1.5m前後である。土層断面の観察によると土塁の構築方法は、最初に堀の間際に粘性のある土と砂礫質の土を交互に水平に積み上げ、基底部の幅6.0m、高さ1.5mほどの小土塁を構築する。次に、この小土塁を核として、東側つまり土塁の内側に小土塁の東斜面の傾斜に沿って、粘性のある土と砂礫質の土を交互に積み上げて成形している。

なお、土塁の東裾部は土塁内部に施された整地層の上に乗っている。したがってこれは内部の整地が施された後に土塁が築かれた状況を示しているといえるが、裾部を後に補修した結果であるとも考えられ、現状では判断できなかった。また、1・3トレンチ断面の状況から、土塁は北に対してかなり西側に振っていることが確認できた。

暗渠3（図版3－3、7－2・3）　土塁2の東裾部で確認した東西方向の石組み暗渠である。石組みの部分は延長2.5mを確認しており、内法幅約0.15m、高さ約0.15mである。底面は西側に向かってわずかに下降している。また、溝の東端は南北方向の素掘り溝と合流しており、本来

は、土塁内側の水を西側の堀（堀１）に排水するための施設と考えられる。構築方法は、まず幅0.7mほどの掘形を掘り、底に平たい石を１列敷き詰める。次に底石の両側に角張った人頭大の石を並べ、隙間には拳大の石を詰めて、断面凹字形の溝とする。さらにこの溝の上に人頭大の石を並べ、やはり隙間には拳大の石を詰めて蓋としている。

建物４（図版３－１、６－２）　調査区の東部で検出した東西４間（6.7m）、南北３間（3.9m）と考えられる東西建物である。北および東側には柱穴が並び、なかには人頭大よりやや小ぶりの石を据えているものもある。柱穴間の距離は約1.5mである。西側柱の柱穴は確認できず、かわって南北方向の石列を検出した。これは、拳よりやや大きめの石を上面が平らになるようそろえ、約1.5mにわたって一直線に並べたものである。また、南側柱も不明確で礎石と考えられる石を２ヶ所確認したにとどまる。これらの石には火を受け赤変したものや炭化物が付着したものも認められる。

なお、建物内部には後述する方形の土壙８がある。また建物のすぐ南、おそらく軒下にあたる部分に甕の据付穴と考えられる土壙９がある。

建物５（図版３－２、６－２）　調査区の南東部で検出した東西２間以上の建物で、南および東は調査区外へ延びる。柵列とも考えられるが、西端の柱穴が1997年の調査[註2]で検出した柱列を北へ延長した位置にあたるため建物と判断した。柱穴間の距離は約２mである。

溝６　調査区の中央部で検出した南北方向の素掘りの溝である。幅約0.4m、深さ0.05mを測る。調査区の南部では削平されて残存していないが、この溝も1997年の調査で検出した南北溝の延長であると考えられる。

溝７　調査区の南東部で検出したＬ字形に曲がる溝である。幅約0.5m、深さ0.05～0.2mを測る。この溝も1997年の調査で検出した石組み暗渠につながる溝の延長であると考えられる。検出状況から、建物２を含め1997年の調査で検出した建物や鍛冶施設を区画する性格をもつものと推測される。なお、溝は山科本願寺廃絶後も踏襲して使用されていたものと考えられ、埋土からは江戸時代の遺物が出土している。

土壙８（図版３－１）　建物４の内部で検出した一辺0.7m、深さ0.2mの方形の土壙である。埋土には多量の焼土と炭化物が混入している。

土壙９（図版３－１）　建物４の南側で検出した土壙である。全体の掘形は東西3.5m、南北1.0m、深さ0.6mの長方形を呈し、中央に直径0.8m、深さ0.3m前後の円形の土壙が東西に３基並んでいる。中央の土壙内部からは、焼締陶器の大甕の破片が出土しており、これらは甕の据付穴であると考えられる。

土壙10　調査区の北部で検出した東西1.5m、南北2.0m以上、深さ0.2mの不定形な土壙である。埋土には多量の焼土と炭化物が混入している。

土壙11　北東部を後世の遺構に壊されるが、東西1.5m、南北1.8m、深さ0.8mの長方形の土壙であると考えられる。土壙の上部には拳大の礫が多量に詰まっている。また、底部には多量の焼土と炭化物を含む層が認められる。

土壙12　東西1.5m、南北2.7m、深さ0.5mの長方形の土壙である。土壙の上部には拳大の角礫が多量に詰まっている。また、埋土には多量の焼土と炭化物を含む層が認められる。

土壙13　東西1.9m、南北1.2m、深さ0.4mの楕円形の土壙である。土壙の上部には拳大の角礫が多量に詰まっている。また、埋土には多量の焼土と炭化物を含む層が認められる。

土壙14　直径1.2m、深さ0.5mのほぼ円形の土壙である。

土壙15　直径約1.8m、深さ0.9mの円形の土壙である。底部に焼土と炭化物を含む層が堆積している。

土壙16　東西1.1m、南北1.5mのやや楕円形を呈する土壙である。中央部に拳よりやや小ぶりな礫が多量に詰まっている。また埋土全体に焼土と炭化物を多く含んでいる。

土壙17　東西3.2m、南北2.0m以上で北側は調査区外に延び、南側は土壙12および13によって壊されている。埋土の下部に焼土と炭化物を多く含んでいる。

このほかに、柱穴や土壙が数基あるが、建物などとしてまとまりがないのでここでは割愛する。

2　江戸時代の遺構

本来は上層から成立していたものである。主に土壙を検出している。これらの土壙は、直径2.0m前後の円形のものが多く、中には木製の桶を埋め込んでいた痕跡を認めるものもある。２基が１セットとなって並んでいたものと考えられ、耕作に伴う水溜や肥料を溜める野ツボとして利用されたものであろう。

Ⅳ　遺　　物

今回の調査ではおもに室町時代と江戸時代の遺物を確認している。土器類が大半で、ほかに石製品や瓦類がある。このほかに、古墳時代の土器をごく少量確認している。

1　古墳時代の遺物

遺構には伴わないが、室町時代の遺構に混入して古墳時代の土師器や須恵器などの土器類がわずかに出土している。当地の近隣には弥生時代から古墳時代の集落跡と考えられる左義長町遺跡があり、これに関連した遺物の可能性がある。

2　室町時代の遺物（図３）

土壙や溝などから、土器や瓦類が出土している。土器類は土師器、瓦器、焼締陶器、施釉陶器、青磁、白磁などがあり、土師器や瓦器の火舎、焼締陶器の甕や擂り鉢などの器形が多い。また、瓦類も比較的多く丸瓦や平瓦のほか、軒丸瓦、鬼瓦、あるいは塼なども認められる。以下、図化できた主な遺物について述べる。

土師器　皿が土壙９の掘形から出土している。皿は赤色系のものと白色系のものがある。赤色系のもの（１）は小型で、底部は大きく内側に凹み、口縁部は内湾しながら立ち上がる。内面はナデ、外面は指オサエの凸凹を明瞭に残している。白色系のもの底部は平らで、口縁部は外上方へ直線的に立ち上がる。口径9.0～10.0cm程度の小型のもの（２～４）と口径13.0～14.0cmの中型のもの（５～７）、口径15.0cmを越える大型のもの（８）がある。内面から口縁部外面はナデ、

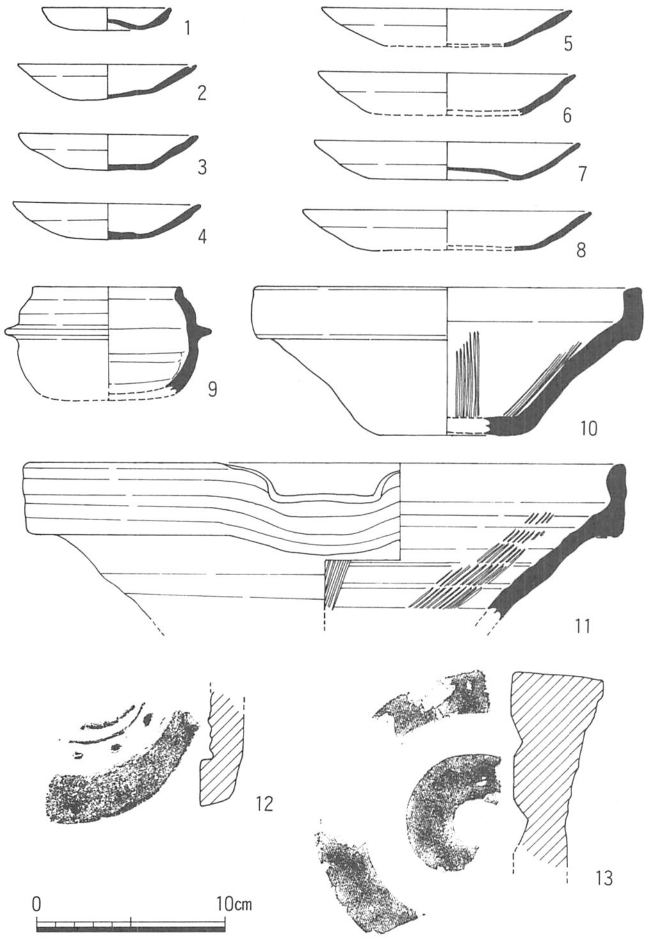


図３　出土遺物実測図・拓影

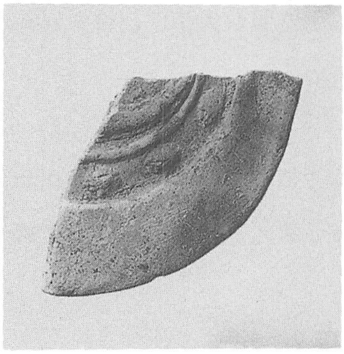


図４　巴文軒丸瓦（12）

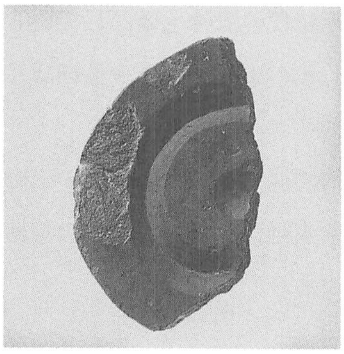


図５　鬼瓦（13）

底部外面はオサエである。

瓦器　小型の羽釜（９）底部は欠損して不明であり、体部は内湾しながら立ち上がる。口縁部も内湾しており、端部を垂直に立ち上げる。外面の体部と口縁部の境には小さな鍔が水平にめぐらされている。全体に厚手で焼成も甘い。体部内外面はオサエの後ナデ、口縁部および鍔はナデである。土壙13から出土している。

焼締陶器　備前の擂り鉢が２点ある。口径20.0cm程度の小型のもの（10）と口径30.0cm程度の大型のもの（11）がある。いずれも底部は平たいと考えられ、体部は外上方に直線的に広がる。口縁部はほぼ垂直に立ち上がり、外側は幅広い面をなす。底部外面は未調整、体部から口縁部の内外面はヨコナデ、また、体部内面には鋭いすり目が放射状に施されている。（11）には片口が作りだされているが（10）は小片のため不明である。（10）は土壙13から、（11）は土壙10から出土している。

巴文軒丸瓦（図３－12、図４）　やや大きめの珠文がめぐる巴文である。小片のため、頭と尾の様子は不明である。胎土は砂粒を含みやや粗めである。色調は淡褐灰色を呈する。土壙17から出土している。

鬼瓦（図３－13、図５）　鬼面を持たない鬼瓦である。文様はヘラで切り込んで施し、表面には丁寧なヘラミガキを施している。残存部分の外周は面取りを施し、稜の部分をヘラナデで調整している。裏面は指ナデの後、一部ヘラナデで調整している。土壙12から出土している。

３　江戸時代の遺物

土壙や堀から土器類が主に出土している。そのほか、五輪塔や硯などの石製品、銭貨などが少量出土している。

Ⅴ　ま と め

今回の調査では山科本願寺関連の遺構、遺物を検出した。特に土塁内側に展開する遺構配置の一端を明らかにできた成果は大きい。

まず、調査区の東部では、小規模な建物２棟を検出した。その内の１棟には、軒下に甕を据え付けた痕跡が認められた。平成９年度に実施した２回の調査[註3]でも、甕倉と考えられる礎石建物や掘立柱建物、そのほかに鍛冶関連の炉跡などが検出されている。こうした状況を考え合わせると、当地周辺は山科本願寺「御本寺」の中でも御堂や寝殿などの存在する主要部分ではなく、貯蔵や手工業生産のための施設が存在した地区であるとみられる。出土遺物に焼締陶器の甕や擂り鉢が多いのもこうした遺構の性格を反映したものと考えられる。しかしながら、これらの施設は方位をそろえ、溝に区画された状況を示しており、造営に際し計画性を持って配置されていることがうかがえる。

次に、建物群と土塁の間には土壙を数基確認した。性格については不明な点が多いが、埋土に焼土と炭化物が多く含まれているものが多いという特徴を示している。こうした点から、これらの土壙は天文元年（1532）の焼き討ちの後に、焼け跡を整理した際のものと考えておきたい。とすれば、山科本願寺の存続時期には建物群と土塁の間は空閑地になっていたものと考えられる。同様に平成９年度の調査[註4]でも建物群の西側では井戸のほかに目立った遺構は検出されていない。この土塁沿いに空閑地が確保されている理由は、防衛上の必要性とも考えられるが、現状では明らかにできなかった。

土塁に関しては、既に上部が削平され、基底部しか残存していなかったが、規模や基本的な構築方法が確認できた。それによると周辺で検出した土塁のものと極めてよく似通っていることがわかる。また、土塁の裾で検出した石組みの暗渠も平成９、10年度調査[註5]のものと比べて規模は約半分であるが、構築方法はまったく同様であることがわかった。

以上、大まかに今回の調査成果をまとめたが、そこには山科本願寺造営における優れた土木技術と一貫した計画性を垣間みることができる。

註１　ａ「山科本願寺跡①」『平成９年度　京都市埋蔵文化財調査概要』
　　　　(財)京都市埋蔵文化財研究所　1999年
　　　ｂ「山科本願寺跡②」『平成９年度　京都市埋蔵文化財調査概要』
　　　　(財)京都市埋蔵文化財研究所　1999年
　　　ｃ「山科本願寺跡」『京都市内遺跡発掘調査概報　平成10年度』京都市文化市民局　1999年
　　　ｄ「山科本願寺跡」『京都市内遺跡試掘調査概報　平成11年度』京都市文化市民局　2000年

註２　註１ｂに同じ。

註３　註１ａ・ｂに同じ。

註４　註１ｂに同じ。

註５　註１ｂ・ｃに同じ。

註６　岡田保良・浜崎一志「山科寺内町の遺跡調査とその復原」『国立歴史民俗博物館研究報告』第８集
　　国立歴史民俗博物館　1985年

註７　註６に同じ。

註８　「山科本願寺跡」『昭和59年度　京都市埋蔵文化財調査概要』
　（財）京都市埋蔵文化財研究所　1987年

註９　「山科本願寺跡（61年度ＲＴ10）」『京都市内試掘立会調査概報　昭和62年度』
　京都市文化観光局・（財）京都市埋蔵文化財研究所　1987年

註10　「山科本願寺跡（ＲＴ５）」『京都市内試掘立会調査概報　昭和63年度』
　京都市文化観光局　1988年

註11　「山科本願寺跡（ＲＴ21）」『京都市内試掘立会調査概報　平成元年度』
　京都市文化観光局　1989年

註12　「山科本願寺跡」『平成３年度　京都市埋蔵文化財調査概要』
　（財）京都市埋蔵文化財研究所　1995年

参考文献

・西川幸次「都市史のなかの中世寺内町」『国立歴史民俗博物館研究報告』第８集
　国立歴史民俗博物館　1985年

・『戦国の寺・城・まち』山科本願寺・寺内町研究会編　法蔵館　1998年

・近藤知子「山科本願寺跡の発掘調査」『リーフレット京都　No.114』
　（財）京都市埋蔵文化財研究所・京都市考古資料館　1998年

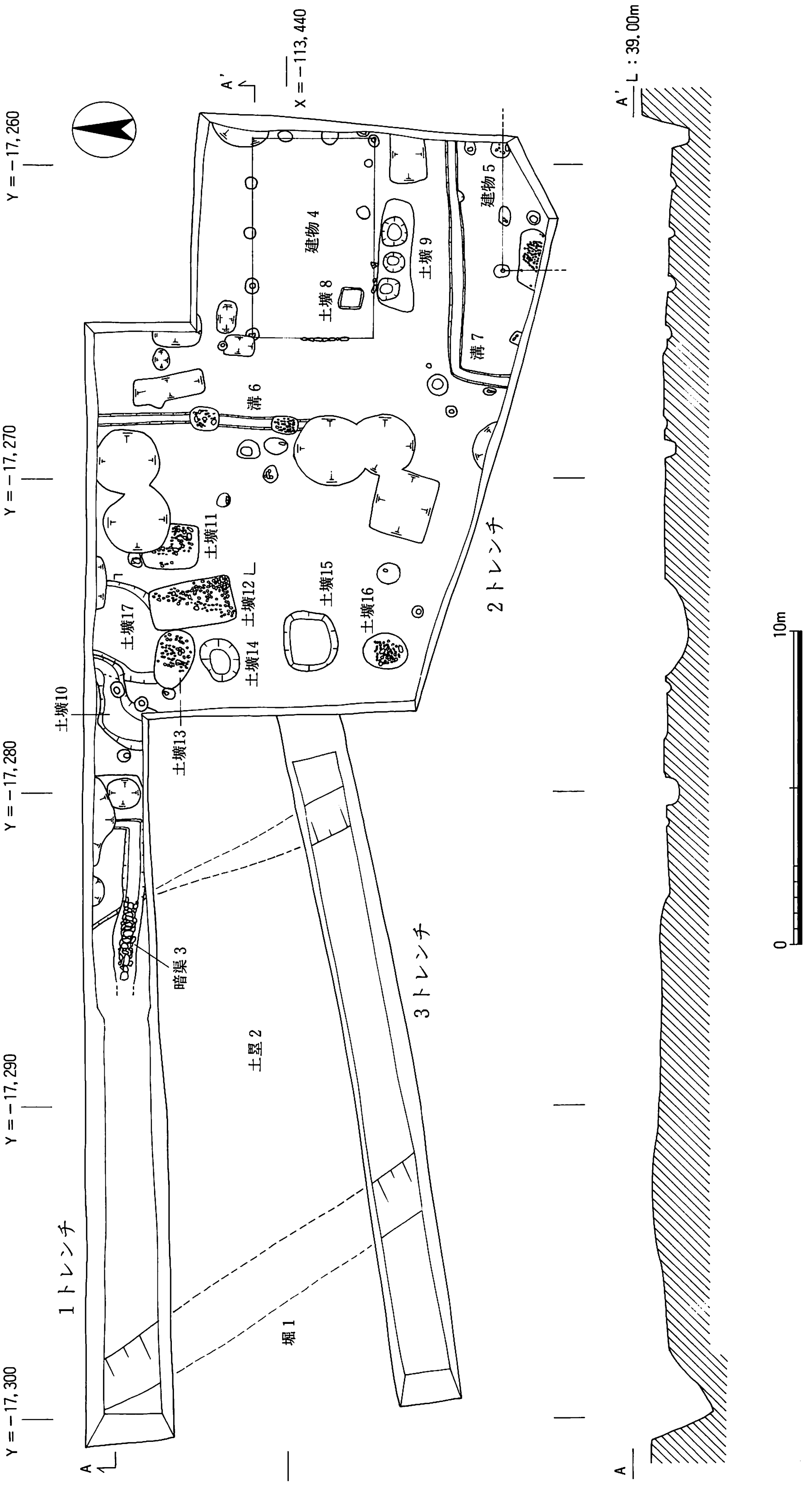
報告書抄録

ふ り が な	きょうとしないいせきはっくつちょうさがいほう
書　　名	京都市内遺跡発掘調査概報　平成12年度
副 書 名	
巻　　次	
シリーズ名	
シリーズ番号	
編 著 者 名	吉崎 伸
編 集 機 関	(財)京都市埋蔵文化財研究所
所 在 地	〒602-8435　京都市上京区今出川通大宮東入元伊佐町265-1　TEL075-415-0521
発 行 機 関	京都市文化市民局
所 在 地	〒604-0925　京都市中京区寺町通御池上る上本能寺前町488　TEL075-222-3108
発 行 年 月 日	西暦2001年3月31日

所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
山科本願寺跡	京都府京都市山科区西野左義長町19-1他	26100		34度58分38秒	135度48分38秒	2000/5/10～6/30	325㎡	駐車場造成

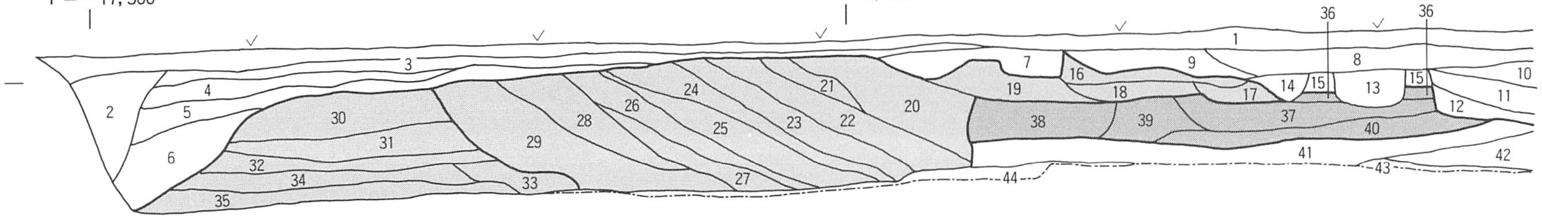
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
山科本願寺跡	寺院跡	室町時代	土塁・暗渠・建物・土壙	土師器・瓦器・焼締陶器	

図　　版


Y＝－17,260
Y＝－17,270
Y＝－17,280
Y＝－17,290
Y＝－17,300
X＝－113,440
A
A'
L：39.00m
建物 4
建物 5
土壙 8
土壙 9
溝 6
溝 7
土壙11
土壙12
土壙13
土壙14
土壙15
土壙16
土壙17
土壙10
暗渠 3
土塁 2
堀 1
1トレンチ
2トレンチ
3トレンチ
0
10m

遺構実測図

1　1トレンチ北壁断面図



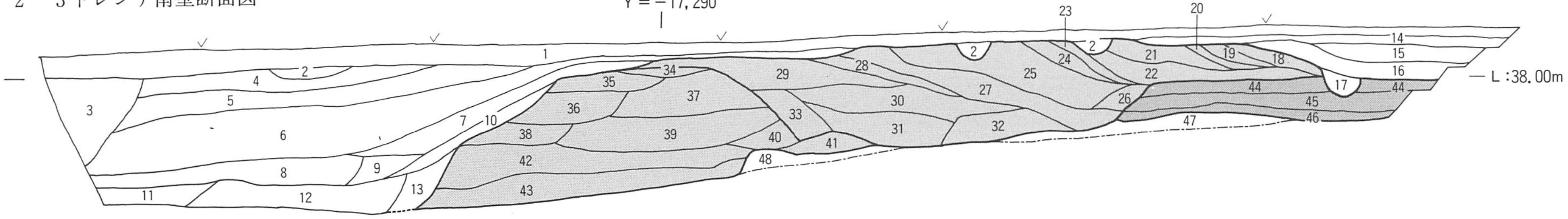
1　砕石（駐車場の整地層）
2　暗褐色〔10YR3/3〕砂泥
3　オリーブ黒色〔5Y2/2〕砂泥
4　暗オリーブ褐色〔2.5Y3/3〕粘質土
5　黒褐色〔2.5Y3/2〕粘質土
6　褐色〔10YR4/4〕粘質土
7　褐灰色〔10YR4/1〕粘質土
8　オリーブ褐色〔2.5Y4/3〕砂泥（焼土・炭化物微量混）
9　暗褐色〔10YR3/3〕粘質土
10　暗灰黄色〔2.5Y4/2〕砂泥（土壙）
11　にぶい黄褐色〔10YR5/4〕砂泥（土壙）
12　オリーブ褐色〔2.5Y4/3〕砂泥（土壙）
13　黒褐色〔2.5Y3/2〕砂泥（土壙）
14　暗オリーブ褐色〔2.5Y3/3〕砂泥
15　暗オリーブ褐色〔2.5Y3/3〕砂泥（焼土・炭化物微量混）

［土塁］
16　にぶい黄褐色〔10YR4/3〕砂礫
17　オリーブ褐色〔2.5Y4/3〕砂泥
18　にぶい黄褐色〔10YR4/3〕粘質土
19　灰黄褐色〔10YR4/2〕粘質土（礫混）
20　褐色〔10YR4/4〕粘質土（黒褐色〔10YR3/1〕粘質土ブロック混）
21　にぶい黄褐色〔10YR4/3〕粘質土（礫多量混）
22　灰黄褐色〔10YR5/2〕砂泥（礫多量混）
23　にぶい黄褐色〔10YR4/3〕粘質土（礫混）
24　灰黄褐色〔10YR4/2〕砂礫
25　灰黄褐色〔10YR4/2〕粘質土（礫混）
26　灰黄褐色〔10YR5/2〕粘質土
27　にぶい黄褐色〔10YR4/3〕砂泥（礫混）
28　灰黄褐色〔10YR4/2〕砂泥（礫多量混）
29　にぶい黄褐色〔10YR4/3〕砂泥（礫多量混）
30　灰黄褐色〔10YR4/2〕粘質土
31　暗褐色〔10YR3/4〕砂泥（礫多量混）
32　にぶい黄褐色〔10YR4/3〕泥砂
33　褐色〔10YR4/4〕粘質土
34　黒褐色〔10YR3/2〕砂礫
35　暗褐色〔10YR3/3〕砂礫

［整地層］
36　暗灰黄色〔2.5Y4/2〕砂泥
37　暗灰黄色〔2.5Y5/2〕砂泥（礫混）
38　暗オリーブ褐色〔2.5Y3/3〕砂泥（礫混）
39　黄褐色〔2.5Y5/3〕砂泥
40　オリーブ褐色〔2.5Y4/4〕砂泥

［地山］
41　にぶい黄褐色〔10YR5/4〕粘質土
42　黄灰色〔2.5Y5/1〕泥砂（礫混）
43　暗灰黄色〔2.5Y4/2〕泥砂
44　褐色〔10YR4/4〕砂泥（礫混）

2　3トレンチ南壁断面図



1　砕石（駐車場の整地層）
2　オリーブ黒色〔5Y3/1〕砂泥
3　オリーブ黒色〔5Y3/2〕泥土
4　オリーブ黒色〔7.5YR3/1〕砂泥
5　黒褐色〔2.5Y3/2〕砂泥
6　オリーブ褐色〔2.5Y4/3〕砂泥
7　暗オリーブ褐色〔2.5Y3/3〕砂泥
8　灰色〔7.5Y4/1〕泥土
9　オリーブ褐色〔2.5Y4/3〕砂泥
10　オリーブ褐色〔2.5Y4/4〕土
11　灰色〔10Y4/1〕砂礫
12　灰オリーブ色〔5Y4/2〕泥土
13　暗オリーブ褐色〔2.5Y3/3〕粘土
14　暗灰黄色〔2.5Y4/2〕砂泥
15　黄褐色〔2.5Y5/4〕砂泥
16　オリーブ褐色〔2.5Y4/4〕砂泥
17　オリーブ褐色〔2.5Y4/3〕砂泥

［土塁］
18　黄褐色〔2.5Y5/3〕粘質土
19　暗灰黄色〔2.5Y4/2〕砂泥（礫少量混）
20　黄褐色〔2.5Y5/4〕粘質土
21　暗オリーブ褐色〔2.5Y3/3〕砂泥（礫混）
22　黄褐色〔2.5Y5/4〕粘質土
23　オリーブ褐色〔2.5Y4/3〕砂泥
24　黄褐色〔2.5Y5/4〕粘質土
25　暗灰黄色〔2.5Y4/2〕砂泥（礫混）
26　黄褐色〔2.5Y5/4〕砂泥
27　黄褐色〔2.5Y5/4〕粘質土
28　オリーブ褐色〔2.5Y4/3〕砂泥
29　オリーブ褐色〔2.5Y4/3〕砂礫
30　褐色〔10YR4/4〕粘質土
31　オリーブ褐色〔2.5Y4/4〕砂泥（礫混）
32　オリーブ褐色〔2.5Y4/3〕粘質土
33　オリーブ褐色〔2.5Y4/3〕粘質土
34　オリーブ褐色〔2.5Y4/4〕砂泥
35　オリーブ褐色〔2.5Y4/3〕粘土
36　暗灰黄色〔2.5Y4/2〕砂泥（礫混）
37　暗オリーブ褐色〔2.5Y3/3〕砂礫
38　オリーブ褐色〔2.5Y4/3〕粘質土（礫混）
39　暗オリーブ褐色〔2.5Y3/3〕砂礫
40　オリーブ褐色〔2.5Y4/4〕砂泥（礫混）
41　暗オリーブ褐色〔2.5Y3/3〕砂礫
42　暗灰黄色〔2.5Y4/2〕粘土（礫混）
43　暗灰黄色〔2.5Y5/2〕泥土

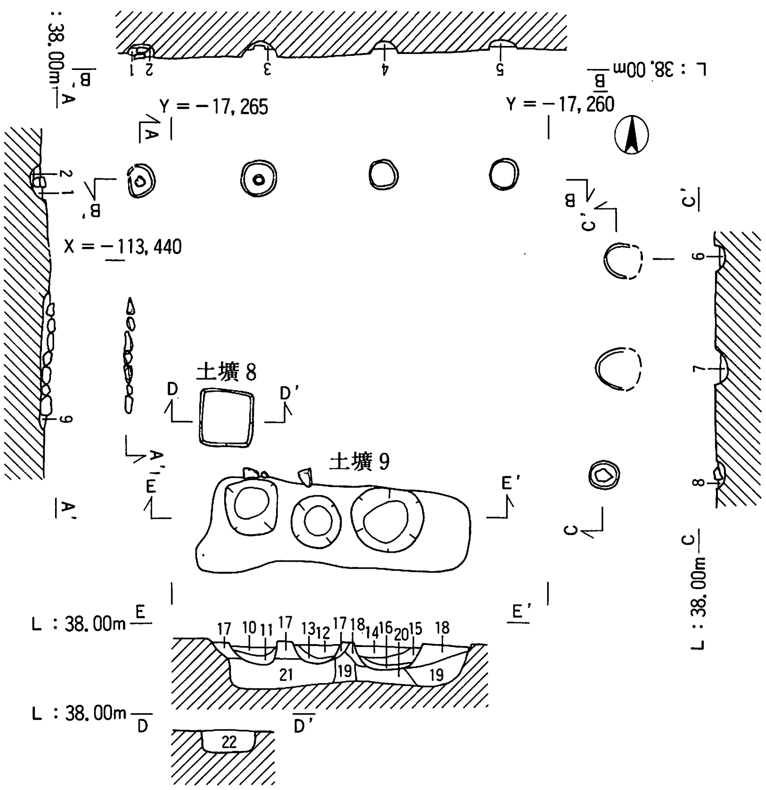
［整地層］
44　暗褐色〔2.5Y5/3〕砂泥
45　オリーブ褐色〔2.5Y4/4〕砂泥
46　オリーブ褐色〔2.5Y4/6〕砂泥

［地山］
47　黄褐色〔2.5Y5/3〕砂礫
48　暗灰黄色〔2.5Y4/2〕砂泥

凡例：土塁／整地層

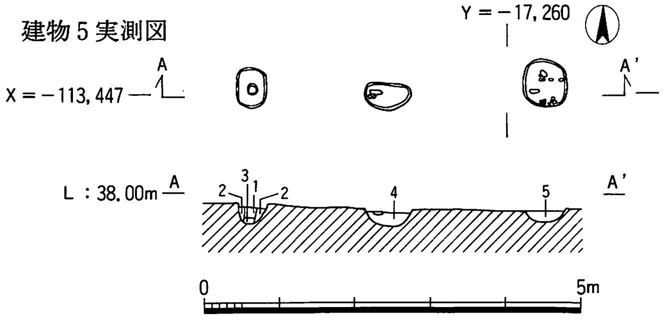
0　5m

1　建物4、土壙8・9実測図



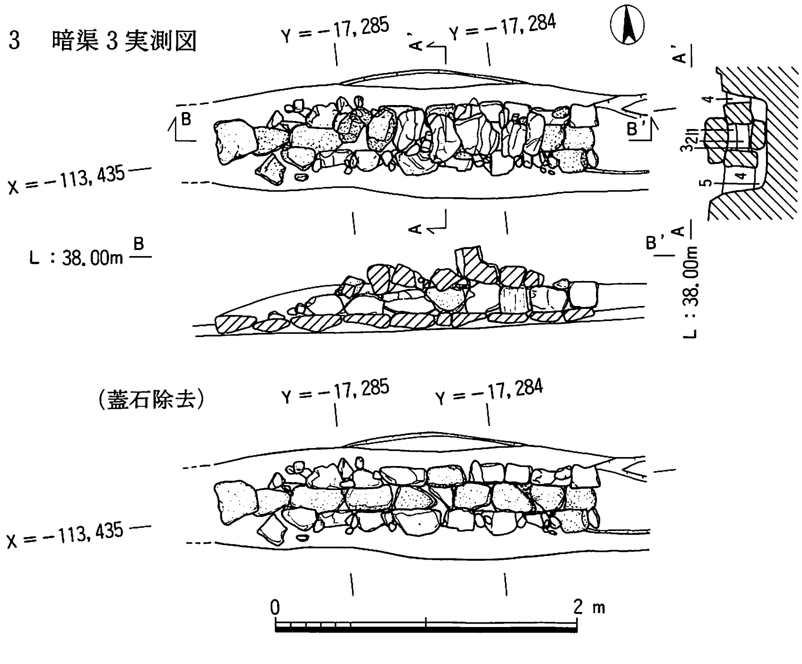
1　オリーブ褐色〔2.5Y4/3〕砂泥（炭化物少量混）
2　暗オリーブ褐色〔2.5Y3/3〕砂泥
3　オリーブ褐色〔2.5Y4/4〕砂泥
4　褐色〔10YR4/4〕砂泥
5　暗褐色〔10YR3/3〕砂泥（礫混）
6　にぶい黄褐色〔10YR4/3〕砂泥（礫混）
7　褐色〔10YR4/4〕砂泥
8　褐色〔10YR4/4〕砂泥
9　褐色〔10YR4/6〕砂泥
10　にぶい赤褐色〔5YR4/3〕砂泥（焼土・炭化物多量混）
11　灰黄褐色〔10YR4/2〕砂泥
12　にぶい赤褐色〔5YR4/3〕砂泥（焼土・炭化物多量混）
13　褐色〔7.5YR4/4〕砂泥
14　オリーブ褐色〔2.5Y4/4〕砂泥
15　黒褐色〔7.5YR4/4〕砂泥
16　黒褐色〔7.5YR3/1〕砂泥（焼土・炭化物多量混）
17　にぶい黄褐色〔10YR5/3〕砂泥
18　褐色〔10YR4/4〕砂泥
19　暗褐色〔7.5YR3/4〕砂泥
20　暗褐色〔10YR3/4〕砂泥
21　暗褐色〔10YR3/3〕砂泥
22　暗褐色〔10YR3/3〕砂泥（焼土・炭化物ブロック多量混）

2　建物5実測図

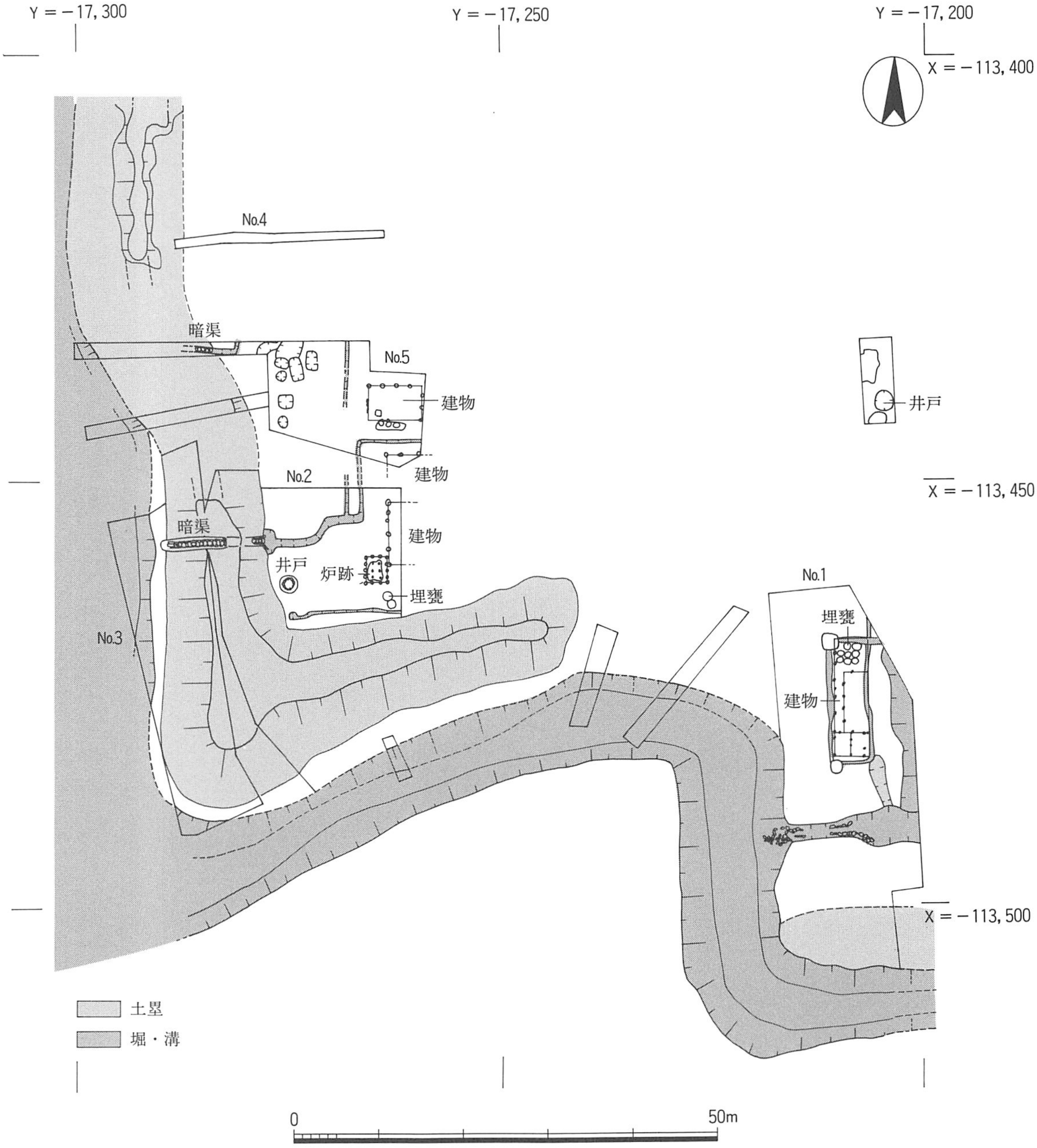


1　暗オリーブ褐色〔2.5Y3/3〕砂泥（焼土・炭化物混）
2　暗褐色〔10YR3/4〕砂泥（焼土・炭化物少量混）
3　暗褐色〔10YR3/3〕砂泥（焼土・炭化物少量混）
4　灰黄褐色〔10YR4/2〕砂泥（焼土・炭化物少量混）
5　にぶい黄褐色〔10YR4/3〕砂泥

3　暗渠3実測図

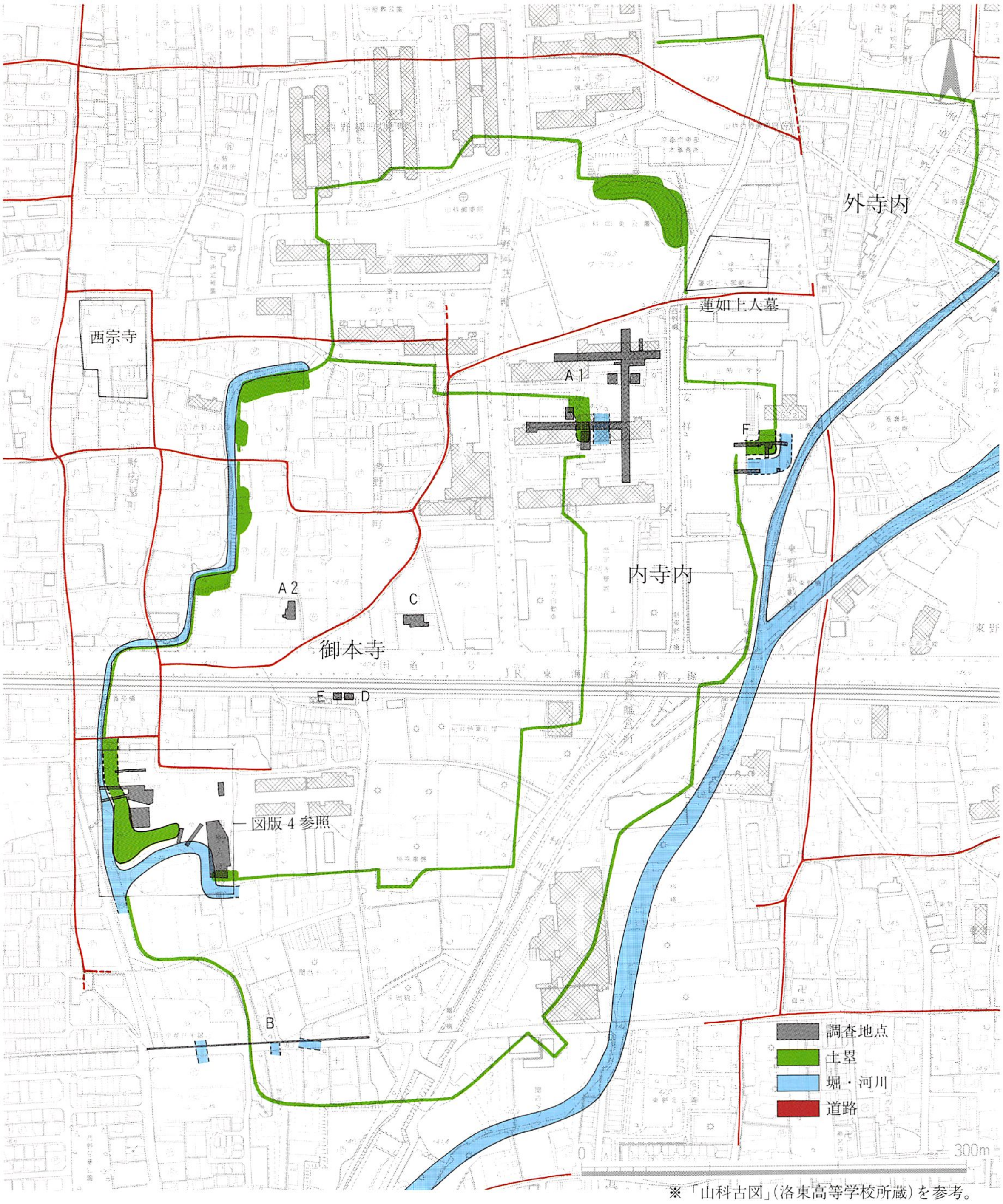


1　暗灰黄色〔2.5Y4/2〕砂泥
2　オリーブ褐色〔2.5Y4/3〕粘質土
3　暗灰黄色〔2.5Y4/2〕泥砂（礫混）
4　オリーブ褐色〔2.5Y4/3〕砂泥（礫混）
5　暗褐色〔10YR3/4〕砂泥



No.	調査名・略記号	所在地	調査期間	面積	調査主体	備考
1	平成９年度発掘調査①　96RT-HG001	山科区西野左義長町16他	1997.04.20～07.10	940㎡	(財)京都市埋蔵文化財研究所	註１ a
2	平成９年度発掘調査②　97RT-HG002	山科区西野左義長町23	1997.07.16～09.18	225㎡	(財)京都市埋蔵文化財研究所	註１ b
3	平成10年度発掘調査　98RT-HG003	山科区西野左義長町23-１・23-４	1998.08.17～11.09	505㎡	(財)京都市埋蔵文化財研究所	註１ c
4	平成11年度試掘調査	山科区西野左義長町	1999.10.28	28㎡	京都市埋蔵文化財調査センター	註１ d
5	平成12年度発掘調査　00RT-HG004	山科区西野左義長町19-１他	2000.05.10～06.30	325㎡	(財)京都市埋蔵文化財研究所	本調査

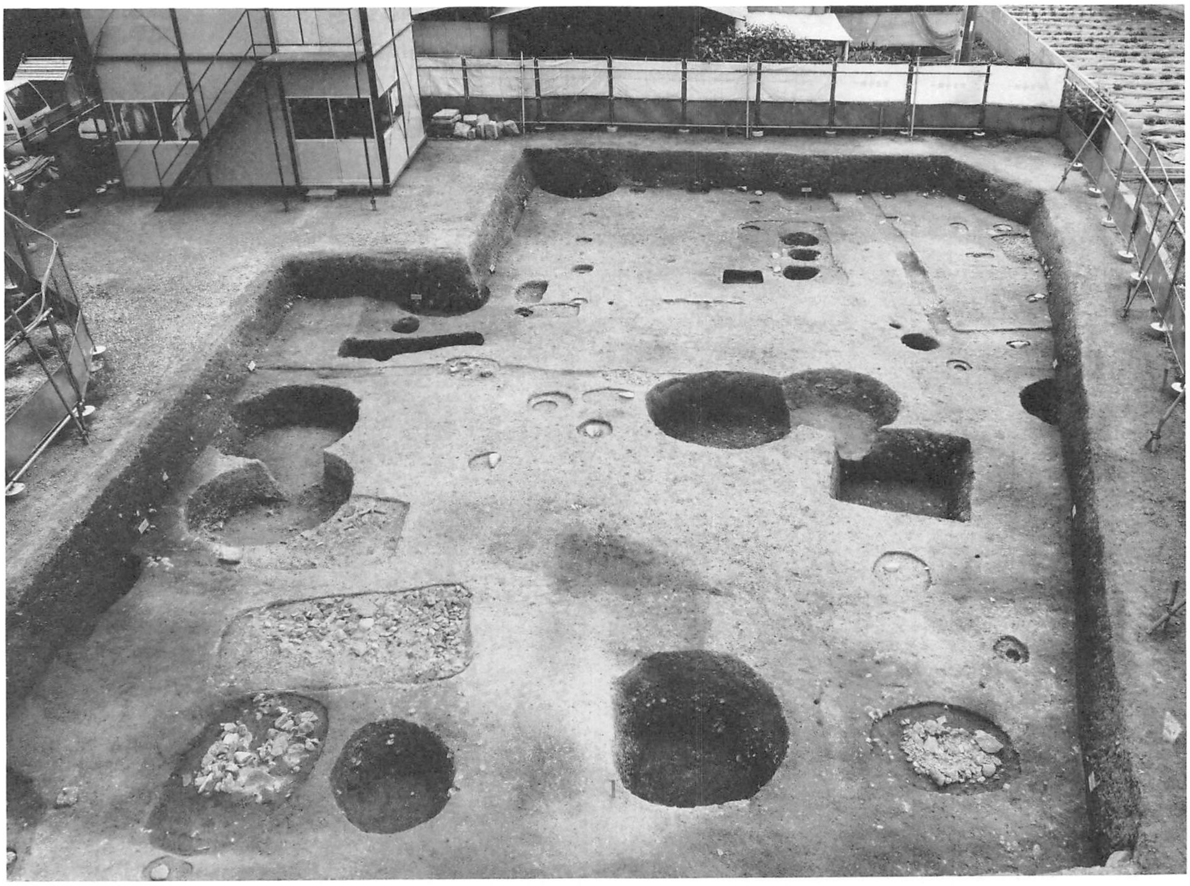
山科本願寺南西部遺構配置図および調査一覧



※「山科古図」(洛東高等学校所蔵)を参考。

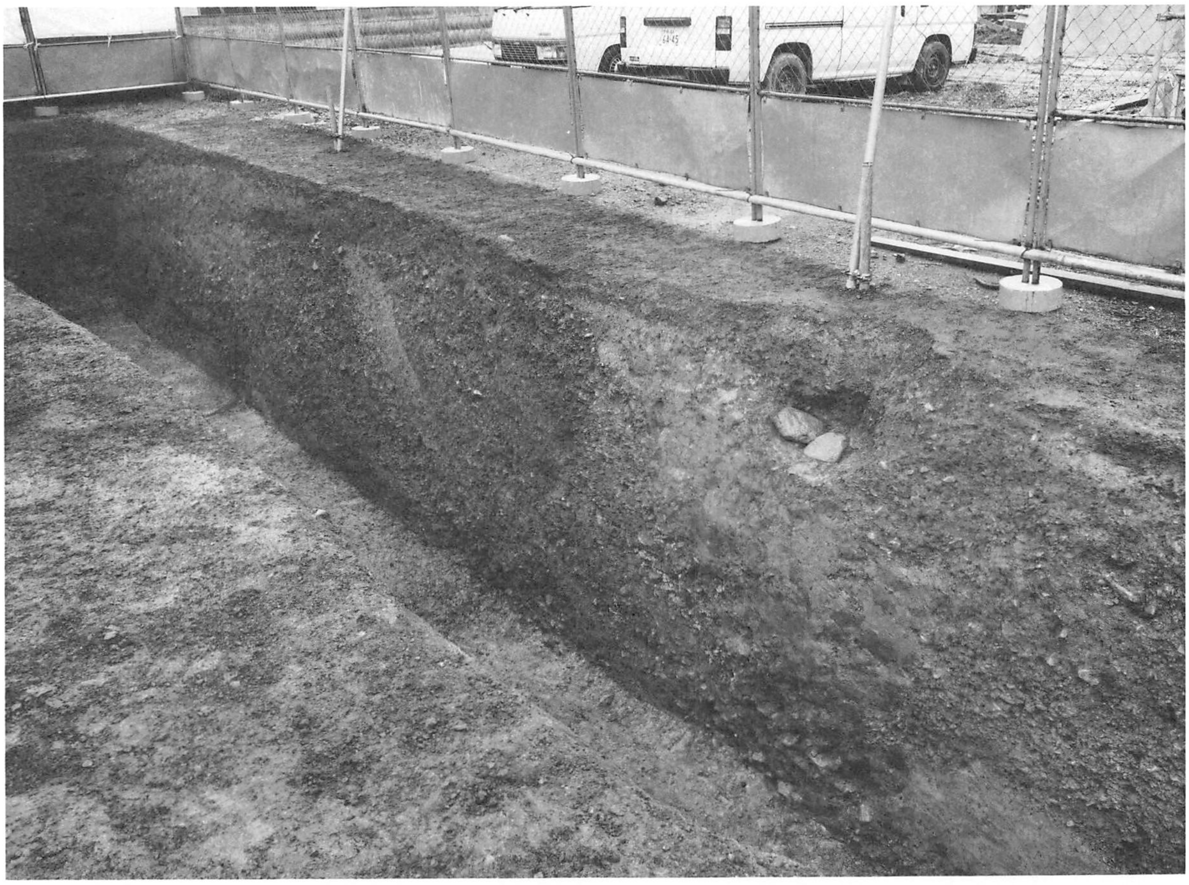
No.	調査名・略記号	所在地	調査期間	概要	備考
A 1	山科寺内町遺跡 第 1 次調査	山科区西野阿芸沢町・ 山階町・離宮町	1973. 05. 21 ～08. 04	土塁と堀の一部を検出、土塁には切通し部分が認められる。 このほか建物、鍛冶場、石垣、柵列、道路などを検出。	註 6
A 2	山科寺内町遺跡 第 2 次調査	山科区西野山階町	1974. 10. 09 ～11. 13	建物を画する石組みの溝、庭園の一部、石室群を検出。	註 7
B	83RT-SW-61I	山科区西野左義長町・ 東野舞台町	1984. 03. 06 ～11. 17	東西および南北方向の堀、土壙群を検出。	註 8
C	85RT10	山科区西野山階町12番地	1986. 01. 27 ～01. 30	幅0. 8mの石組み東西溝を検出。	註 9
D	88RT 5	山科区西野山階町29番地	1988. 05. 30 ～06. 02	幅0. 8mの石組み東西溝を検出。	註10
E	89RT21	山科区西野山階町29番地	1989. 10. 02 ～10. 14	幅0. 8mの石組み東西溝および南北溝を検出。 東西溝は調査Dの続き。	註11
F	91RT-AH001	山科区西野大手先町 (山階小学校構内)	1991. 08. 20 ～10. 18	土塁と堀の屈曲部を検出。	註12

山科本願寺復原図および調査一覧



1　調査区全景（西から）

2　建物４・５（北から）



1　土塁2断面の状況〔1トレンチ北壁〕(南東から)

2　暗渠3検出状況（東から）

3　暗渠3蓋石除去後の状況（東から）

京都市内遺跡発掘調査概報

平成12年度

発行日　2001年３月31日
発　行　京都市文化市民局
住　所　京都市中京区寺町通御池上る上本能寺前町488
編　集　㈶京都市埋蔵文化財研究所
住　所　京都市上京区今出川通大宮東入元伊佐町265-1
　　　　TEL（075）415-0521
印　刷　真　陽　社